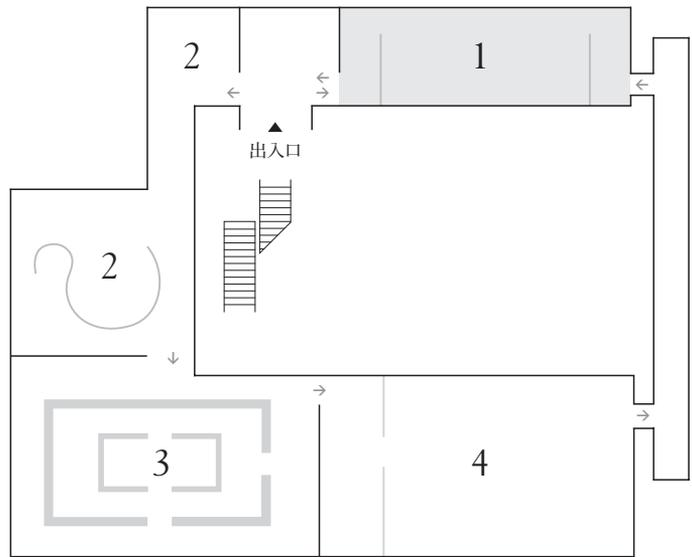


私の正しさは誰かの悲しみあるいは憎しみ

MOT
Annual
2022

My justice might be someone else's pain



-
- | | | |
|---|-------|-----------------|
| 1 | 高川和也 | Kazuya Takagawa |
| 2 | 工藤春香 | Haruka Kudo |
| 3 | 大久保あり | Ari Ookubo |
| 4 | 良知暁 | Akira Rachi |

高川和也

Kazuya Takagawa

《そのリズムに乗せて》

2022年

映像 | 52分

上映スケジュール [開始時刻]

[10:30](#) [11:25](#) [12:20](#) [13:15](#)

[14:10](#) [15:05](#) [16:00](#) [16:55](#)

内なるものを言葉にし、表出することで何が起きるのかを探る約50分の映像である。ただ記述することを課して書かれた高川自身の過去の日記。そこには、おもてに現れるはずのない自己の欲望や苦悩がそのままに書かれている。高川は、ラッパーのFUNIの力を借り、日記の言葉をラップに変換しようと試みる。日記の読み解きをおこなうグループワークでは、書かれた言葉について話されることで、過去の高川が書いた日記が複数の人に共有され、書いた本人やその時の感情から離れ、誰のものでもなくなっていく。言葉は表出されることで、自分自身の、あるいは他者による次の言葉を起こさせる。何を言い表せているかに関係なく、理性を超えた感情を外に出す行為が私たちの心に作用する。その時、メタファーによる言い換えや韻を踏むことで、言葉同士の思わぬ結びつきが生まれ、限定的な意味がずらされていく。リズムに乗せて声に出し、自分の外側にあるものに合わせ、形にしようとする時、自己からの解放の可能性が開かれる。

出演 FUNI、山森裕毅、SSAADN、海老名楓、木村彩乃、

佐々木統美子、菅原放、堀内奈穂子、高川和也

撮影・録音 川田淳、稲田禎洋、小鷹拓郎

翻訳 クリストファー・スティヴンズ

協力 高吉機器製作所 / 高吉危機製作所、

Unplugged jam proud、Social Gallery KYEUM

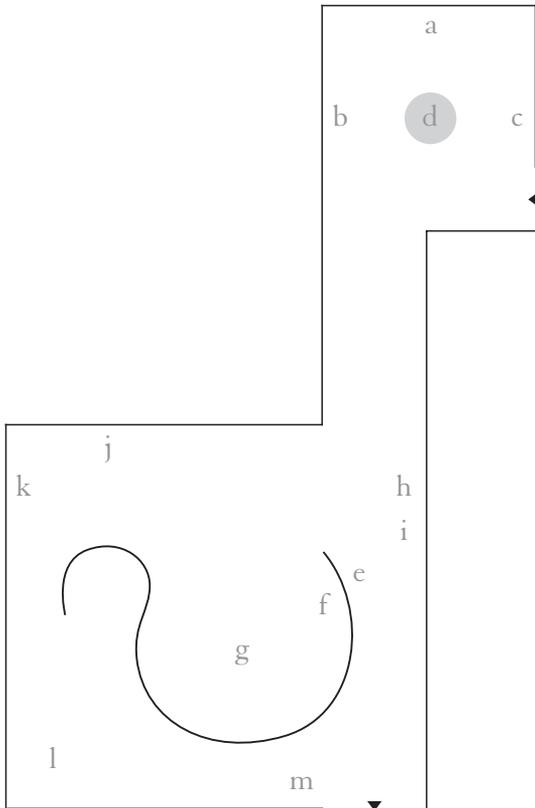
本作は一部に暴力的、差別的、卑猥な表現や言い回しが含まれています。

工藤春香

Haruka Kudo

《あなたの見ている風景を私は見ることはできない。
私の見ている風景をあなたは見ることはできない。》

2022年



都市部への水と電力の供給をおこなう相模湖。その湖にほど近い障害者施設で事件は起きた。工藤は、産業の発展の一方で移動を余儀なくされる人々の存在に目を向ける。重ね合わされた年表のおもて側でたどる優生政策の歴史からは、誰もが時代の中でつくられてきた制度と社会構造の上に立たされていることに気づかされるだろう。女性の権利のために戦う女性たち自身が優生思想との間で揺れ動くように、その構造の中で、各人の立場は両義的である。本作では、表裏を成す歴史として、障害当事者運動の年表がその内側に対置されている。当事者があげる声が次の声となって広がり、変化を獲得してきたことが、

現在の、障害者の自立生活を支える諸制度へとつながっていることが示される。工藤はこのたび、施設を出て自立生活を始めた方とその介助者の方たちをたずねた。みなに同じように開かれている目の前の景色も、それぞれが別々の仕方で見覚しているということ。言葉を介さずとも、触れ合う他者がいることによって、互いの生を照らし合っていることへの気づきがあらわれている。

[●=作家によるテキスト]

a 「相模湖と旧日蓮村勝瀬地区」

水彩、鉛筆/紙

- この絵に描かれている相模湖は、日本初の人造湖である。日中戦争が激化した1938年、軍事産業を展開していた京浜工業地帯の水と電力の不足を補うために、京浜工業地帯と近接している神奈川県津久井郡(現・神奈川県相模原市)を対象にダム建設計画が始まった。相模川の河川敷にダムが建設されることになり、移転させられる日蓮村勝瀬地区の住民の激しい反対運動があったが、1942年に工事が始まり、戦後1947年に米国の資金援助をうけ完成した。これにより日蓮村勝瀬地区と近隣の地域136戸が湖底に沈んだ。この絵はかつての勝瀬地区の写真をもとに、同じ位置からの相模湖の風景を重ねて描いている。

b 「相模湖ができたことで消えた旧日蓮村勝瀬地区の周辺地図」

1898年の地図を模写

c 「相模湖が完成した年の周辺地図」

1947年の地図を模写

d 「鏡と折紙のカヌー・ボート」

鏡、木、紙

朝日新聞1964年5月10日夕刊5面、朝日新聞1964年7月27日朝刊1面、朝日新聞1964年10月4日朝刊14面、朝日新聞1964年10月21日朝刊20面、朝日新聞1964年10月23日朝刊22面記事の一部を模写

- 相模湖では1964年の東京オリンピックでカヌー競技が行われた。同じ年の2月、相模湖町では日本初の18歳以上の重度知的障害者の専用施設「津久井やまゆり園」が開園した。オリンピックでのカヌー競技について報じる当時の新聞記事を模写し、カヌー・ボートの形に折り相模湖に見立てた鏡の上に置いた。

e 「1917年から2022年までの主に旧優生保護法を中心とした障害に関する政策・制度・法律等をまとめた年表」

布に印刷

f 「1878年から2022年までの障害当事者運動に関してまとめた年表」

布に印刷

g 「施設の中の共同スペース」

ソファ、スニーカー、シャツ、コカ・コーラのペットボトル

h 「マーガレット・サンガーの肖像画」

油彩/カンヴァス

- マーガレット・サンガーはアメリカ合衆国の産児制限活動家、フェミニスト、性教育者、全米家族計画連盟の創始者である。女性が自らの体の仕組みを知り、避妊の知識を学ぶよう広めた。一方で優生学の唱道者でもあった。

i 「加藤シズエの肖像画」

油彩/カンヴァス

- 加藤シズエは日本のフェミニスト、産児調節活動家、政治家である。1922年に来日したマーガレット・サンガーと出会ったことで妊娠と墮胎から女性を守るという思想のもと、日本で産児調節運動を展開した。参議院議員になったのち「不良な子孫の出生の防止」を訴え、福田昌子、太田典礼とともに優生保護法法案を提出した。

j 「モナ・リザ展とモナ・リザの入っているガラスケースにスプレーをかけた女性を報じる新聞記事」

読売新聞1974年4月20日夕刊9面記事の一部を模写

- 1974年、東京国立博物館で「モナ・リザ」展（文化庁・東京国立博物館・国立西洋美術館主催）が開催された。会場が混雑することを理由に入場制限がしかれ、介助を必要とする障害者や高齢者、乳幼児連れの入場があらかじめ断られていた。そのことに対する抗議として、会場で米津知子氏は《モナ・リザ》の入っているガラスケースに向けて「身障者を締め出すな!」と叫びながら赤いスプレーを噴射した。自身も足に障害を持ち、ウーマン・リブの活動家として女性の性と生殖に関する選択の自由を求める活動を行っていた米津氏は、1972年、最初に国会で優生保護法改正案が提出された際、女性の中絶に関する「経済条項の削除」に対して女性の権利を侵害するものとして反対運動を行っていた。一方で、優生保護法改正案をめぐっては、障害当事者団体が「胎児条項の導入」（胎児が重度の精神又は身体の障害の原因を有するおそれがある場合も中絶を認めるというもの）について反対運動を展開していた。米津氏が「モナ・リザ」展で抗議を行った1974年は、改正案が審議未了で廃案となった年で、異なる立場から改正案に対して反対運動を行っていた女性団体と障害当事者団体の両者が、反発しながらも話し合いを続けていた時期でもあった。

k 「相模湖の水を京浜工業地帯に運び、京浜工業地帯の植物を相模湖に移住させる」

映像 | 40分

- 相模湖の水は神奈川県工業用水の水源地であり、相模川の下流に位置する川崎市の京浜工業地帯や横浜みなとみらい21地区などに供給している。相模湖町に1964年に津久井やまゆり園が開園すると、入所者の半数を占めていたのは横浜市、川崎市の出身者であった。この映像は、水という資源を上流（山間部）から下流（都市部）へ供給すること、都市部に住んでいる障害のある人々が山間部へ移住すること、そうした上流と下流の構造について考えるために実際に相模湖と京浜工業地帯とを歩いて往復した記録である。相模湖の水を持って水路に沿って下り、その水を京浜工業地帯に流し、逆にそこに生えていた植物を相模湖まで持っていき、移植した。

l 「尾野一矢さんの部屋」

ソファ、机、ドラえもんぬいぐるみ2つ、シャツ、タブレット、コカ・コーラのペットボトル、テレビのリモコン、靴14足

- 尾野一矢さんは2016年にあった相模原障害者施設殺傷事件の被害者であり、現在は津久井やまゆり園を退所し、地域で自立生活を送っている。障害のある人の自立生活とは、必ずしも身辺自立や経済的自立を指すのではなく、「家族や施設の管理の下での暮らしではなく、その人が望む場所で普通に暮らしていくこと」「どのような重度の障害があっても、自分の人生を自分で選択し決定すること。選択、決定の有無も自分で決めること」「障害のある人が自分の人生の主体者であるということを周りの人達が認めること。福祉サービスの雇用者・消費者として援助を受けて生きていく権利を周囲が認めていくこと」とされている。一矢さんは今、自分の好きなものを食べ、好きなテレビを見て、通所施設で仲間と作業をし、介助者とともに一人暮らしをしている。

m 「あなたの見ている風景を私は見ることはできない。私の見ている風景をあなたは見ることはできない。」のためのテキスト

紙に印刷

[お一人1枚ずつお持ちください]

取材協力 尾野一矢、尾野剛志、尾野チキ子

大坪寧樹、川田八空

[特定非営利活動法人自立生活企画]、

山田智昭、内山満、大崎務

[社会福祉法人かながわ共同会庁が谷やまゆり園]、

成田洋樹[毎日新聞社]、猪瀬浩平[明治学院大学]

デザイン補助 向山達也

映像撮影・編集 奥村直樹

映像プロジェクト管理 瀧口幸恵

翻訳 ローズ・キューウェイン・マイケル、紺野優希、葉思堯

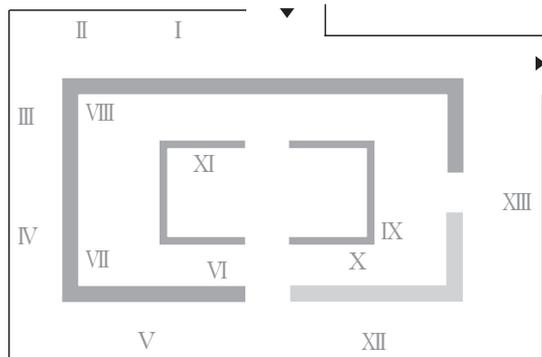
制作補助 牧ゆかり、工藤富海子

大久保あり

Ari Ookubo

《No Title Yet》

2022年



大久保は本展で、自身の過去の13作品を編纂している。これまでの作品で使われたテキストの抜粋とそれに関連するもので構成された回廊状の空間で、過去につくられたものが新しい物語の素材となって配置されている。しかし、ここで使われているオブジェや写真などは、かつて展示されたものとは限らない。現在の作者が、過去の作品を思い出しながら言葉と物を選択する中で、それぞれの作品の中に含まれていた異なる時制が、現在とも交錯していく。ここでいったん編まれた物語は、未来に書かれる小説の始まりでもある。内側が外側で、外側が内側の空間。意味は同じなのに書き方が異なる四つの言語。つくられたものと「ほんもの」のもの。それらが混じり合う中で語られる、記憶、幽霊、昔話、夢、諍いなど不確かで曖昧なものたち。この物語空間で、誰かの物語はやがて私の物語になる。捉えられない曖昧な輪郭の自己とそれを取り巻くものが、「つくられたお話」によって像を描き始める。

本作で引用している大久保ありの過去の13作品

- I 《美術館の幽霊》2015年
- II 《東の熊、青い森の幽霊》2017年
- III 《山の夢》2011年-
- IV 《ペーグルを入れた紙袋は空っぽに》2010年-
- V 《パンに石を入れた17の理由》2013-2020年
- VI 《争点のオブジェクト》2015年
- VII 《妄想する》2012-2021年
- VIII 三部作
《Black Circle is Nothingness》2000年-
《White Cube is Emptiness》2017年-
《Grey Horizon means Death》2018年-
- IX 《おもいだせない》2008-2013年
- X 《I won't Forget》2017-2025?年
- XI 《私はこの世界を司る あなたは宇宙に存在する要素》2018年-
- XII 《Love Letters》2009-2019年
- XIII 《ワンダーフォゲルクラブに入るための良い答え、もしくは、四千円を手に入れるためのまあまあな答え》2011年-

過去作についての詳しい情報は
No Title Yet 特設ウェブサイト
→ ariookubo.com



制作協力 森田浩彰、山田宗一郎
会場設計・施工 株式会社 酒井一吉事務所
特殊塗装 志田塗装
グラフィックデザイン 小池俊起
照明 山本圭太
仕器制作 毛涯達哉〔神ひとケモノ〕
翻訳 鄭梨愛+佐藤香陽子、葉思堯、ロバーツ美波

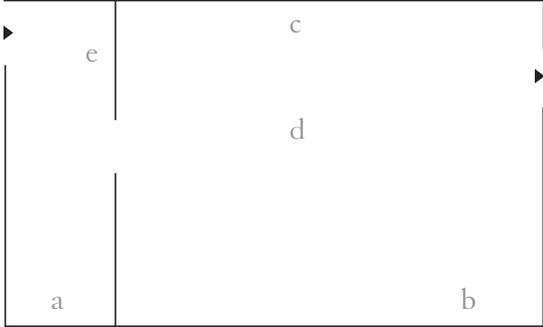
写真 阪中隆文
翻訳 荒川直行+ティナ・ヴァンブルック、
スタン・アンダーソン、奥村雄樹、押村優
協力 野村裕、樋熊冬野、優美堂、ANONYME、
HAGIWARA PROJECTS

良知曉

Akira Rachi

《シボレート/schibboleth》

2020/2022年



読み書きや発音など、時に言葉は識別のための装置として機能する。しかし、言葉が指し示すものや、その使用における差異は、識別しようとする対象とびたりと重なるとは限らない。それなのに、あたかも明確な分断線が既定のものとしてあるかのように、線引きとそれによる排除がおこなわれることがある。良知は境界線の曖昧さやその狭間で失われるものの存在を忘れないために、識別のための言葉を想起のための装置へと転換する。作品を構成するのは、テキストの投影といくつかの物だけである。あかりの灯されていないネオン管や、ある時間を指したまま止まっている時計。記号として何かを指し示すはずのそれらの機能が一時的に保留され、その状態の前で立ち止まり、考えることを促す。日常の中でふと時計を見る時や、カードに記された発音記号に変換された一節を目にする時など、言葉とそれによる線引きによって失われるものの存在を思い出すきっかけが、この作品に触れるものに対してすでに手渡されている。

- a 「シボレート/schibboleth」のためのテキスト
スライドプロジェクション | 日韓英3言語
- b 《rát》
ネオン管
- c 《15:50》
時計
- d 「rát frəm ðə left tə ðə rat əz ju: si: it spelt hɪə.」
葉書
[お一人1枚ずつお持ちください]
- e 「シボレート/schibboleth」(東京都現代美術館、2022年)
のための冊子
紙に印刷
[お一人1冊ずつお持ちください]

翻訳 馬定延、アンドリュー・マークル
協力 シマダネオン、西日本スライド広島、
IRREGULAR RHYTHM ASYLUM、space dike

MOTアニュアル2022 私の正しさは誰かの悲しみあるいは憎しみ
MOT Annual 2022 My justice might be someone else's pain

2022年7月16日〔土〕—10月16日〔日〕
東京都現代美術館 企画展示室 3階
主催 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館

本リーフレットは、
「MOTアニュアル2022 私の正しさは誰かの悲しみあるいは憎しみ」展の
出品リストおよび鑑賞ガイドである。

執筆 西川美穂子〔東京都現代美術館〕
デザイン 小池俊起

© 東京都現代美術館2022



English